

ですが、12月からはHANDS事業(外国人児童生徒教育支援)から、宇都宮大学国際学部の学生ボランティアさんを派遣いただき、タガログ語で教えていただきました。慣れ親しんだタガログ語で話しているときの表情はとてもリラックスしていました。打ち解けて話せたのだなと感じました。

学習は各生徒の状況に合わせて、個別学習を中心に進めています。課題は高校進学に向けた入学試験です。漢字のある問題文を読んで理解するところが高いハードルになっています。通級教室のようにひらがなで説明すれば理解できるのですが、漢字や記号の習得にはかなりの時間を要しています。しかし、校内の定期テストでは、問題文の漢字にひらがなのルビを振るため、できる問題が多くあります。そういった中で、昨年度末には外国人児童生徒教育推進協議会で「高校入試の学力検査問題にひらがなのルビを振ることへの要望書」を作成していただきました。他県の状況調査から、来日6年目までこの配慮をしているいくつかの県があることを知り、ぜひ栃木県でも検討していただきたいと思います。

生徒たちは日本での生活に慣れ、明るく中学校生活を送っています。日本語と母国語、英語と複数の言語を話せるのですから、将来は国際社会へ大きく羽ばたいていけると期待しています。これからも、一つひとつ丁寧な指導、支援を行っていきたいと考えています。

### 高校受験に向けてさらなる連携を

足利市立山辺小学校長 福田 郁男

本校は児童数476名の小学校であり、群馬県との県境にあります。外国籍の児童数は22名、そのうち日本語教室に通級している児童は15名です。日本語指導担当教諭2名で対応しています。国籍は東アジアや南米が多く、ついでヨーロッパもいて、グローバル化の加速により、児童数は年々増加傾向にあります。そのため、益々、外国人児童生徒教育の必要性や重要性が高まってきており、試行錯誤的なものではなく、システム化が喫緊の課題となっています。

本校ではDLAアセスメントによる学習診断を行い、その結果に基づいて、個に応じた指導、支援を行っています。さらに一人一人の児童の状況把握に努め、その実態によって日本語指導や教科補充指導、生活指導、学習適応指導等を行っています。日本語指導に関する縦・横のつながりが少ないため、群馬県の先進校の視察を通して参考にし、本校独自の取組をしてきたが、昨年度、「外国人児童生徒教育推進協議会」に参加させて頂いたことにより、情報交換による他校、他地区の様子や取組、課題を伺え、とても参考になったと同時に小中高の連携協力や国の動き、目指すべき方向

性が明確になりました。この協議会をさらに充実させていくことで基盤ができ、さらなる連携につながると確信する次第です。

一番のキーポイントは高校入試と捉えており、計画的に小学校でやるべきこと、そして引き継いで中学校でやるべきことを積み重ねていくことにより、児童生徒が安心して、落ち着いた環境の中で取り組み、対処できるようになる一連のシステムが必要であり、急務であると察します。今後とも情報の共有、発信をしながら、さらに連携を深めていくことが大切であると考えます。



## 多言語による高校進学ガイダンス

